

創刊100周年

# 幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

2001

2



第一巻第一号(明治34年創刊号)表紙

第100巻 第2号 日本幼稚園協会

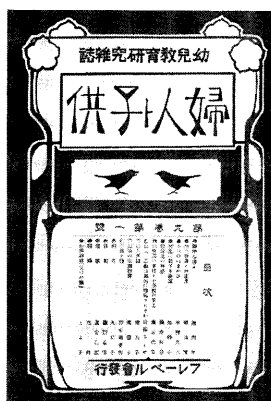




くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部  
(03)5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第100巻 第2号



# 幼 児 の 教 育 目 次

—— 第一〇〇巻 第二号 ——

© 2001  
日本幼稚園協会

雑誌の運命

——『幼児の教育』創刊一〇〇巻記念に寄せて——……………本田 和子……………(4)

ある日……………(12)

幼稚園誕生の時代——関信三の葛藤——(六)洋行……………国吉 栄……………(14)

いま、子どもたちは

子ども集団を見ていて感じる——児童館の様子——……………秋庭 智子……………(24)





私が幼児教育を志した頃(15) ..... 津守 真 (30)

耳をすまして 目をこらして(11) ..... 宮里 暁美 (40)

ラオスという国で出会った子どもたち ..... 小林 美実 (42)

こころをあわせて ..... 佐藤 寛子 (50)

ハロー・ディア・エネミー! ..... 平尾美智子 (58)

表紙絵／片柳 淳子

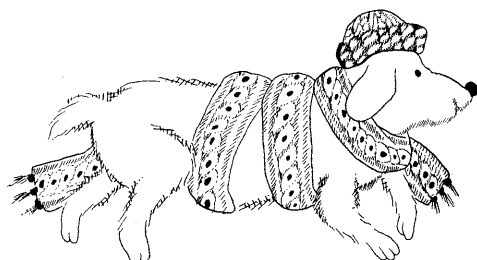
扉題字／津守 真

扉カット／第九巻第一号表紙・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ

編集委員／田代 和美・高橋 陽子・榎田 正子

編集部／仲 明子





# 雑誌の運命

—『幼児の教育』創刊一〇〇巻記念に寄せて—

本田 和子

## 「雑誌」というメディアの誕生

ハンプルクの神学者ヨハン・リストが、世界最初の雑誌形態の文書を世に贈ったのが、一六六三年とされている。雑誌に「マガジン」という呼称が与えられたのが、一八世紀半ば。イギリスの印刷業者エドワード・ケープの創刊になる『ジェントルマンズ・マガジン』の大ヒットがその呼称の定着を促し、斯界を活気づけて、矢継ぎ早に各国で各種の雑誌が発刊されるようになった。

イギリスの『レビュー』や『エグザミナー』、あるいはアメリカ合衆国の『ニューヨーク



ク・マガジン』『マサチュセッツ・マガジン』など、一八世紀は、評論誌の全盛期であり、政治・外交・文化等を素材とする評論が筆鋒鋭く誌面を飾り、当時の為政者たちは印紙税を課すなどして批判を押さえようと企図したと言われている。政府当局をも恐れさせたという雑誌の威力は、一号毎に主題が選ばれつつ定期的に継続刊行されるというその形態に起因するところ大であったと言うべきだろう。何しろ、事が起こればすかさずそれを取り上げることが出来、一号で論じ尽くせぬ時には、より詳細な取材を重ねつつ、同じ主題を次号で継続することが出来る。時事問題の主題化と論評、その掘り下げという、一般書の担い得ぬ役割を、見事に担って見せたのが新進の出版物「雑誌」であったのだ。

わが国の場合、一八六七年、柳川春三による『西洋雑誌』がその嚆矢とされている。主たる内容は、オランダの雑誌からの重要記事の翻訳紹介であり、幕府の洋書調所の洋学者たちがその任に当たった。

そして、明治近代化とともに、雑誌は出版界の花形となる。森有礼や福澤諭吉による『明六雑誌』、あるいは徳富蘇峰の主宰する『国民の友』などが、時代の世論をリードしたことはよく知られている。知識人たちは、毎月刊行されるこれら雑誌を手にして、その時々の特記すべき出来事に注目し、それに対する有識者たちの見解を知ること、時代に対して開かれた目を持つ







つことが出来た。目を開かれる、すなわち「啓蒙」こそが、初期の時代の雑誌の目的であつたろう。

ここで、「啓蒙」という性格を、あえて「初期の時代」と限定したのは、やがて、娯楽や情報を主内容とした「大衆雑誌」が出現するからである。二〇世紀に入ると、『講談倶楽部』や『キング』に代表されるような大衆娯楽雑誌が創刊されて、とりわけ『キング』は、「二〇〇万部の国民雑誌」とその隆盛を誇るようになる。この時代に、雑誌は知識人の独占物ではなく、広く一〇〇万に及ぶ人々の暮らしのなかに入り込み、彼らの身近にあつて彼らを楽しませるものと化したのである。

## 二〇世紀の女性誌

『明六雑誌』の創刊は一八七四年、『キング』の創刊が一九二五年である。僅か五〇年の間に、斯界に一〇〇万部の部数を誇るマンモス雑誌が出現する。このことが物語るのは、出版物としての「雑誌」の持つ独特の性格であろう。すなわち、誌面を飾るのは、複数の著者による複数の評論や複数の小説、そして、一編が長くとも一〇ページ程度、短い場合は数ページで一編が完成している。ということは、一つの評論、あるいは小説を読むのに、何ほどの時間も必要としないということなのだ。

人々にとって、雑誌は、単行本と異なり、気軽に手にして、ほんの少々の時間で読み終えることの出来る媒体だった。雑誌を読むために、わざわざ読書の時間を設定すること



も、また、威儀を正して机に向かうことも、いずれも不要。単行本と同様、紙面に印刷された活字の群れでありながら、それは、読者に対して何ら仰々しい構えを要求せず、いとも手軽に活字と戯れることを許してくれる。大衆雑誌の出現がなければ、およそ、読書などいう行為と無縁に過ぎたかも知れない人々が、自身の楽しみとして活字に目をさらすようになったのは、雑誌に備わっていたこの性格、すなわち、短時間で読めて肩肘張ることのない手軽さのおかげだったと言えよう。

さて、わが国最初の本格的な幼児教育誌とされる『幼児の教育』（発刊当時は『婦人子ども』）誌は、明治三四年、二〇世紀の幕開けとともにその歩みを開始している。「児童教育法の研究」「婦人教育殊に母としての婦人教育の普及」「家庭に向かって好個の読書材料を供給する」、いずれもわが国教育界の急務として掲げられた以上三つを発刊の目的に掲げて、荒木十畝の考案になる撫子と母蘇の図柄に彩られ、『婦人子ども』と高嶺秀夫の題字が寄せられた本誌は、幼児教育者と家庭婦人向けの贈り物であることを高らかに謳っていた。その書名の通り、子どもを核として女性の啓蒙が意図されていたのである。

ただし、『婦人子ども』誌は、その

誌名の示す通り、女性の最重要な役割を「子どもに奉仕する保育の営み」と特定し、そこに寸分の狂いもなく正確に照準を合わせている。扉に掲げられた「一人





の賢母は百人の教師に当たる」という高嶺秀夫の揮毫は、このことを物語って絶妙であった。一八八五（明一八）年に発刊された女性誌で、時代のオビニオンリーダ的な役割を果たしたとされる『女学雑誌』が、女性の使命として「ホーム」の形成を強調しつつも、婦人参政権や廃娼問題を常に巻頭に掲げて、人権論的・社会的論題を焦点化し続けたのに比して、本誌の視点は惑いもなく「子どもの養育」に当てられている。

二〇世紀は、「子ども」を中心化し、彼らを巡って旋回を始めた時代である。「児童中心主義」が新しい時代精神として高らかに鼓吹され、人々が「子ども」に希望を託しつつ明るい未来を望み見ようとしたのだった。「いまの人間よりは、次の世代の子どもこそがより進化した種として人類の進歩に貢献する」と、「進化論」が主導し、「優生学」が増幅させた「人権改良論」と、それに基盤をおく「子ども進化思想」は、幼い者を中心に押し出し、彼らに理想の人類像が仮託されて、未来を夢見ることを可能としたのだった。家庭婦人と保育者を対象とした保育雑誌は、こうした時代の心性の所産であり、明治以来女子教育を支えた「良妻賢母思想」と、新しい時代精神たる「児童中心主義」との申し子として姿を現したのである。

### 子ども関連誌に担わされた使命とその変貌

一八九八（明三一）年、子ども研究の新天地を開くことを標榜して、『児童研究』が発刊されている。児童心理学者の高島平三郎が主幹として編集責任を負い、帝国大学心理学





教授の元良勇次郎が祝辞を載せ、アメリカ心理学界を代表してスタンレー・ホールもメッセージを寄せるなど、賑々しい門出であった。『児童研究』は、その発刊の趣旨を次のように謳い上げる。すなわち、現今の人間に関する学問研究は、発生学に見られるように、「人間の基礎部分たる乳幼児期の解明」を不可避とし始めたこと、また、教育の基本には「子どもの科学的研究」を基礎づけねばならないこと、の二点であった。

『児童研究』は、その基底に、当時の新進科学たる「発生学」と「科学的児童研究、特に児童心理学」を選び取り、それらに関する内外情報の伝達と、それを解説した啓蒙記事とで内容を満たした。元良の弟子である新進気鋭の心理学者たちが、陸続と執筆陣に加えられる。執筆者のなかには、若き心理学徒倉橋惣三の名前も含まれていた。

それに遅れること三年、一九〇一（明三四）年に産声を上げたのが、本誌『幼児の教育』である。『児童研究』が普遍的孩子も研究を意図し、読者対象も子どもにかかわる不特定多数の研究者と教育者を設定したのに比して、本誌のターゲットは、明確に幼児教育者と家庭婦人に絞られている。ここに見られるのは、一方では、幼児教育施設の普及とそれに連動した幼児教育の多様化・大衆化であり、他方、中産階級の成立に伴う「専業主婦」の確立であり、育児を重要使命と自覚させられた彼女たちの「母性意識」であろう。雑誌の使命が、彼女た





ちの啓蒙と実践指針の提供であつたことは、こうした背景を如実に物語るものでもある。

本誌が一〇〇年に及ぶ歩みのなかで、その時々の変化に戸惑う保育者たちに、思慮深い情報提供を試みつつ混乱を回避し、見つめるべきものは「子ども」であり、耳を傾けるべきものは「子どもの声」であると、子ども中心主義的な本道を見失うことなく、不変の啓蒙に徹してきたとは、夙に指摘されているところであろう。第二次大戦後に簇出した同類誌のなかでも、本誌が際立ってその特色を誇示し続け、さながら「同人誌」のような同一カラーで彩られてきたのもこの所以であつた。過去の一〇〇巻を緋くなら、本誌が保持し続けた「子ども中心主義」が仮初めのものではなかつたと知られ、その使命感の一徹さに浅からぬ感慨を抱かされる。

ところで、予想を超えた現代のメディア状況の変化は、活字文化の急速な後退を余儀なくさせている。活字で綴られた書物や雑誌から知識・情報を得るよりは、インターネットで探し出した方がつとりはやく豊富であるという、電子メディアの時代へと急テンポで突入しつつあるのが、わが国の現状であろう。「本を読む人」の減少と、「雑誌の売れ行き不振」が嘆かれているが、これは、必ずしも一過性の現象と言い得ないのではないか。かつて、口承文化と文字文化の交替劇が見られたように、活字メディアと電子メディアとの交替劇が、いま速やかに進行しつつあるのだから。

とすれば、訪れるメディア革命の時代に、「雑誌の運命」はどこに求められるのだろうか。書物のCD化が進み、ホームページを利用した雑誌の出現も、さほど遠い日のことで



はないかも知れない。しかし、それら、テクノロジー的な変化にもまして、雑誌の使命に要請される変化とは一体何であるのか。

情報提供やそれに伴う啓蒙に関しては、伝達速度という点から活字メディアは電子メディアに劣るだろう。特に、月に一回の刊行物である「雑誌」に関しては……。しかし、媒体を通して、一言一言、一行一行を熟読吟味し、行間に思いを潜めつつ思索に耽るという行為に関しては、紙面に印刷された活字文化がより優位に立つ。このことは、何よりも、私どもの経験が教えてくれるところであろう。

「雑誌」の使命と性格は、それを読む者たちが、読むことを媒介として、「思い巡らし」、そのことに「沈潜し」「思いを深める」ことにあるのではないか。今後、雑誌の発行が続けられ、少数ながら「読者」なる者が存在し続けるとすれば、それは、こうした「雑誌の性格」と不可分に結ばれた地平に、新しい「雑誌を媒介とした共同体」が生まれることであるとして、私ども関係者たちはその新しい共同体の誕生を寿ぐべきであろう。

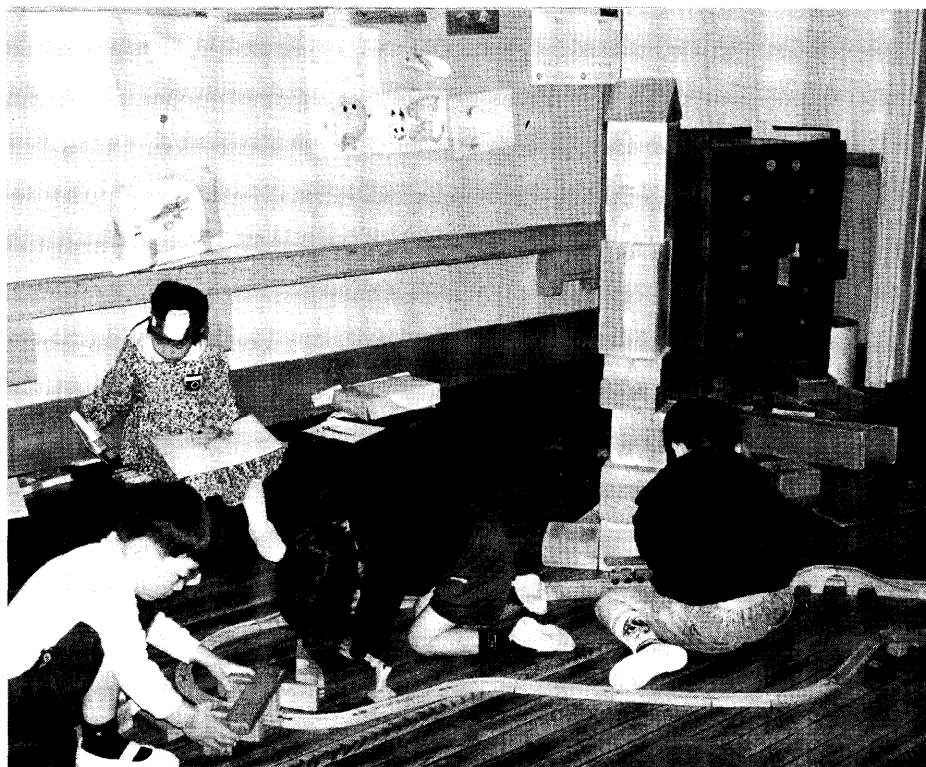
(聖学院大学)





# ある日





摄影・平野 清



## 幼稚園誕生の時代

—— 関信三の葛藤 ——

国吉 栄

### (六) 洋行

関信三となって

明治五年九月十四日の夜、月明かりに乗じて、数人の男たちが横浜港の大栈橋に停泊していた一隻の蒸気船に乗り込んだ。フランス船籍ゴタベリー号。船は夜明けとともに錨を上げ、大洋へとすべりだした。

ひそかに乗船した男たちは東本願寺の洋行団の一行

であった。メンバーは、法嗣（次の法主）現如、随行者として加賀松任本誓寺住職松本白華、金沢永願寺住職二男石川舜台、かつての幕臣成島柳北、そして今や関信三となった安藤劉太郎である。

安藤劉太郎は、洋行の企てがほぼ固まった頃に名前を変えている。すなわち、七月十八日、主だった者が集まって洋行の密議が行われたが、その二日前に差し

出した諜者報告書には、すでに「安藤劉太郎」ではなく、「信太郎」と署名している。つづいて「関信太郎」。出発直前の九月十日付の報告書には、彼の最後の名前となった「関信三」と署名している。だから、「関信三」は諜者時代とは無関係の、幼稚園界だけの名前ではない。彼は「太政官諜者関信三」として、キリスト教探索の拠点であった横浜から旅立ったことを覚えておきたい。

この時の洋行は、長い大谷派の歴史にとって（次期）法主が国外に出るといふ画期的な出来事であったが、ほぼ同時期に行われた島地黙雷ら本願寺派の洋行に比べ、精彩を欠くものであったと言わざるを得ない。そもそもこの洋行は、政府要人の要請によるもので、東本願寺自身から出た企てではなかった。北海道開拓を終えたばかりで大きな借財を抱える東本願寺にとっては、むしろ迷惑な話で、洋行が見るべき成果を残さなかったのも、そこに遠因があったといえよう。

ところが一方で、キリスト教阻止をめざして最前線で働いてきた人々にとっては、洋行は千載一遇のチャンスであった。彼らはこれをキリスト教阻止のための最後の賭けととらえたのである。彼らは本山には内密に、関信三を英国の神学校に送りこむという驚くべき計画を立てた。大谷派の歴史にとってあまり意味を持たなかった洋行は、関信三にとって特別な意味を持つことになる。彼自身の洋行記録は発見されていないが、さいわい、洋行の随行者たちの航海中の記録が公開されているので、これらによって関信三の足跡をたどってみたい（註）。

### 英国へ

荒れる海で船酔いに苦しみながら、九月二十日、彼らは初めての停泊地、香港に到着した。誰にとっても初めて見る異国であった。東本願寺一行も、同行の日本人たちと共に上陸し、菓子を食べ、麵を味わい、散

策を楽しんだ。そしてここで松本白華・石川舜台・関信三の三人は合議の上、ひそかに神学校入学のためのパスポートとでも言うべき、英国教会への紹介状を手した。

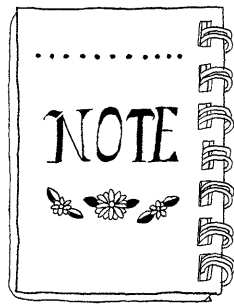
香港で短時日を過ごしたのち、船を乗り換え、サイゴン、シンガポール、ペナン、セイロンを経て、開通したばかりのスエズ運河を通過したのが十月二十二日、そして六日後、一行は無事マルセイユに到着。数日をマルセイユに遊んで、パリに着いたのは十一月一日の未明であった。

関信三は、パリに着くと、すぐにも英国に向かいたいと願ひ出た。故国で待つ同志たちを思えば、パリであたら日を過ごすことはできなかったのだろう。けれども実際に彼が英国に旅立つのは、それからおよそひと月後のことである。言葉が不自由な一行が落ち着くまで、どうしても彼が必要だったからである。

この間に一行は、大使館を通じて「改暦」の知らせ

を受けている。故国において太陽暦が採用され、明治五年十二月三日をもつて明治六年一月一日と改定する旨、布告されたのである。太陽暦

は英語では「Christ Year」、つまりキリスト暦のことである。彼らにとつて改暦はキリスト教解禁への一里塚にはかならなかった。松本白華は「我僕之憂更増一層」と書いた。フランス上陸後、彼らの憂いは深くなる一方だった。彼らがパリに到着した未明、いまだ天は黒々としていたのに、パリの街はガス灯に輝いていた。壮大なホテルに驚き、博物館に驚き、王宮に驚き、動物園に驚いた。キリスト教国の力に圧倒される思いであった。そこへ「本国でキリスト暦採用」の報である。彼らの憂いは「更増一層」であった。



明治六年一月八日（以降西暦）、関信三は同行の人々と別れ、香港で手にした紹介状をふところに、ひとり英国に渡った。そして、ロンドンの南西およそ四十マイルほどの、テムズ川南岸に開けたレディングという古都に落ち着く。英国教会伝道会社（C・M・S）が運営する神学校で学ぶためであった。C・M・Sは、関信三が破邪僧猶龍ユウリウであったころ、長崎で師事していた宣教師エンソールを派遣した組織である。

校長は、かつてセイロンに派遣された宣教師であったから、極東の禁教下でキリスト教信仰を告白したというこの日本人の来訪を、奇跡とまで感じて歓迎したことであろう。異文化圏での生活を体験していた校長は、学校での教授ばかりでなく、関信三が直面している生活習慣の違いに配慮しながら、教会と家庭生活に彼を好意的に迎え入れたはずである。彼もまた、日曜日ごとの礼拝はもちろん、さまざまな教会生活に積極的に加わったことであろう。関信三はレディングにお

いて、英国の日常生活を体験し、日常生活におけるキリスト教の働きや役割などについて観察する機会を得たのである。

しかし、この生活は長く続かなかった。関信三がレディングに居を定め、生活が落ち着き始めたころ、ついに本国でキリスト教が解禁された。明治六年二月二十四日、クリシタン禁制の高札が静かに下ろされたのである。「改暦」の報は二週間ほどでパリの彼らの耳に届いているから、この報も、おそらく三月中には関信三まで届いたのではないだろうか。すでに十分にその予兆はあったとしても、キリスト教解禁は、関信三にとって決定的な意味を持っていた。彼は、早くも四月には、レディングでの暮らしに自ら終止符を打っている。

この彼のすばやい決断は、彼の「留学」の目的が、キリスト教およびキリスト教国について知りたいという、一般的あるいは学問的関心に根差したものではな

かったことを、はつきりと示している。大前提が崩れた以上、キリスト教の神学校に学ぶ理由はまったく失われたのである。一見穏やかなレディングでの暮らしは、彼にとって苦しみ以外のなにものでもなかった。

学問を続けたいのであれば、以後もそこに留まることは可能であるばかりか、さまざまな便宜が得られて有益であつたはずである。けれども彼には、偽りの上に築かれた人間関係をこのまま維持し、その中で暮らしていくことは、もはやできなかつたのであろう。彼は一刻も早く、偽りの生活から逃れたかつた。キリスト教の解禁は、大義の喪失という虚脱感がありながらも、一方では、長崎以来身につけざるを得なかつた、人も自分も偽る生活からまったく解放されることでもあつた。

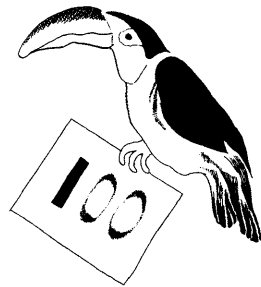
四月、関信三は、レディングを去り、ロンドンの中心部から南東におよそ一マイルほど下つたブロッケレーという小さな村落に転居した。そのあたりは鉄道

が通るまでは閑散とした農村地帯で、目立つ建物といえば、追いはぎの巣とうわさされる宿屋がひとつあるばかりであつたという。産業革命

のはてにロンドン市内の住環境は著しく悪化し、富裕層からロンドンを脱出していた。一八四〇年以降、運賃の安い鉄道が普及したことによって、近郊にいわゆるベッド・タウンが形成されるようになる。ブロッケレーもそうして住宅地となつた地域のひとつだつた。

関信三が移り住んだ一八七〇年代初めは、新興住宅地が増殖する緒についたところ、と言ってよいだろう。

キリスト教解禁の事実を知り、神学校を去つても、彼は東本願寺一行のもとに帰ろうとしなかつた。彼は、ひとりになれる時間と空間が必要だつた。彼がど



のような経緯でこの地を選んだのか不明であるが、そこには、がむしやらに何かを調べたり学んだりすることを動機づけるものは見あたらない。むしろそこは、彼にとつて隠遁所のようなものであつたらう。殺風景ではあるがのどかな新興住宅地で、束縛のない生活をしながら、彼は、キリスト教阻止に命をかけてきた自分という存在について考え続けたであらう。そして、今こうしてひっそりと暮らしている英国というキリスト教国の實際に、ようやく目を向け始めていったのではないかと思われる。

しかし、プロツケレーにおける関信三の生活は、決して安閑としたものではなかった。洋行の本隊、松本白華から、気になる報告を受けていたのである。

### 現如との確執

関信三が英国に旅立つ前から、現如の行状は、しだいに傍目にもかんばしくなく写り始めていた。東本願

寺一行の洋行は、先行きの見通しが不透明であつた。キリスト教が解禁され、かりそめの目的すら失われた。現如を（パリから離して）留学させてはどうかという外からの勧めもあつたが、資金が不足し、パリで借金をしている状況であつた。そこで、白華が現如の随行としてヨーロッパに残り、石川・成島の二人はイギリスに立ち寄つた後、アメリカまわりで帰国することと決められた。現如と白華は、長く滞在したパリを引き揚げ、ベルギー、ドイツに向かうことになった。石川と成島は明後日、現如と白華はいよいよ明日パリを發つ、という日の夜のことである。

四月二十四日、「夜十時小野・石川来、藤原不在悄然婦」。この夜、白華らは現如をいさめるつもりだったようである。しかし、現如は戻らず、小野・石川は悄然と帰るほかはなかった。二十一歳の青年現如としては、パリ最後の夜に、わざわざ説教されるために帰りたくない、というところであつたらう。ふたりが



帰った後、白華は珍しく日記に思いの丈をぶちまけた。「余徒百万保護して善二導んとするに聴きたまはす（中略）嗚呼これ何事そや。余断腸の苦迫れり」。

このような出発である。彼らの旅は困難なことが多かった。資金的にも厳しくなり、白華は現如に代わって、全権大使あてに借金願いの手紙を書いたり、他にも借金を依頼している。

五月十二日、フランクフルトでの日記。「藤公無情使人愁殺」。何があつたのか。翌十三日、白華は借金のためにふたりの人物を訪ねた。彼らは白華に帰国を勧めた。現如もこれに同意し、帰国することが決まった。

帰国することに決めてふたりはバリに戻った。そこで決定的な破局が訪れる。十七日「藤公親奪會計權、余返納之。藤公貽余及関生金二三五〇F、更貽一紙放逐書。余急報之竜動在留之石川・関・成島」。石川・成島が帰国に決まってから、成島に代わって白華が会

計係になっていた。この日、現如は白華の會計權を取り上げ、白華も、それを返上したのである。會計を握った現如は、白華と関信三に二三五〇フランと、さらに「放逐書」を渡したという。随行者としての任が解かれたのである。白華はロンドンの石川・関・成島に急報した。

二十一日、知らせを受け驚いた関信三が、急ぎバリにやって来た。石川らは二十日にすでに帰国の途についたという。白華と関はお互いの事情を語り合った。白華にしてみれば、もう関信三しか心情を打ち明けられる者はなかった。憤りと、財政のひっ迫。しかしその日、現如は、もう一度會計をやってくれるよう白華に頼んだのである。

翌二十二日、関信三は白華に同行し、弁務使館を訪れた。一度戻って、今度は現如に同行し、関は再び弁務使館を訪れた。借金を頼みに行ったのである。

二十三日、現如は白華にこれまでのことを謝罪。弁

務使館から借金の方が応諾され、白華と関信三が受け取りのため弁務使館その他に出向いた。一応落ち着いたかに見えたこの日の夕刻のことであろうか、現如は白華に、お前の宿料は高いから払えないと申し渡した。随行役を罷免された時に、二十五日までの宿料を現如が払うことになっていたらしい。白華は、二十三日までの宿料を出していただければ幸甚ですと答えた。彼は、その日のうちにパリを離れることを決意する。

翌二十四日早朝、白華は関信三と共にロンドンに出発した。そして数日をロンドンに過ごしたのち、二十八日に、ひとりパリに戻る。六月四日、白華は現如に同道して帰国の途についた。

キリスト教解禁後ブロッケレーに移ってから、関信三が最も心を悩ませたのは、キリスト教の問題でも、異文化の問題でもなく、彼が属し、そのために働いて

きた集団の問題であった、ということは彼にとって大きな意味を持っている。

彼が謀者という没個性の黒子として生きることを自らに課したのは、幕末以来、彼が、本山、すなわち法主に対して、ロイヤリティーを保ち続けていたからにはかならない。真宗における法主と一般僧侶との関係は、幕藩体制における武士の、藩主に対する忠に近いものがある。しかし、宗教集団として鎌倉以来の歴史を持つ真宗教団は、宗祖親鸞の法灯を「血脈」、すなわち血縁関係によって伝承することによって、他の仏教集団とは異なる教団形成をとげてきた。その意味では、法主の絶対性は、時に他家から養子を迎えることも辞さなかった幕藩体制以上のものである。「血脈」と「信仰」が結びついているという点では、天皇制により近いのではないか。

法主の絶対性は、疑いのない、自明なものとして、自己の存在の大前提として存在する。法主に対する口

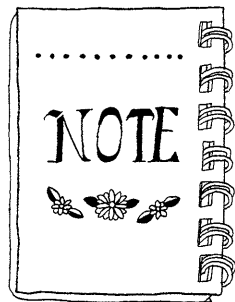
イヤリティーはその絶対性に基盤を置いている。管見ながら、親鸞の思想の中にその萌芽があったとは思えない。むしろ人間一般に、ある種のことを絶対化し、神格化したいという欲求が存在しているのであろう。しかし、そのような人間の欲求を、親鸞以降の教団形成において有効に利用してきたのも、また事実である。

関信三は、真宗内部での学問ばかりでなく外においても学問をし、外の人間との交流も体験し、また比較的中央に近いところにいたことから情報も入りやすく、法主に対して全く無批判な絶対視をしていたとは思われない。むしろ彼は批判精神をもって、本山中枢を見ていたはずである。英国での神学校行きが、基本的には本山に内密で行われたことも、そこに理由の多くはあるかもしれない。しかし、法主は真宗大谷派を形成する巨大経済組織のヒエラルヒーの頂点に立つものであり、彼自身の人生もその中にしっかりと組み込

まれていた。法主の絶対性を否定することは、自らを組織の外に置くことを意味した。仏教滅亡という危機感の中で護法のために働くこと

は、彼にとって、ひびが入りつつあったロイヤリティーの依って立つ基盤を自ら補強する作業であったとも言えるだろう。しかし今、故国を遠く離れた新しい秩序の中で、彼は故国でのキリスト教解禁を知り、また人間現如と出会ったのである。

六月八日、現如と白華とがすったもんだのあげく帰国したのちも、関信三はひとり英国に残った。関信三には長く虚脱感が残った、と思う。キリスト教が解禁され、諜者としての存在理由が失われても、それは彼にとって完全な基盤の喪失ではなかった。なぜなら彼



が破邪僧となり、謀者となったのは、宗門を護るためであり、護るべき宗門が存在している限り、彼の存在理由は失われるはずのものではなかったからである。故国では依然として仏教が厳しい立場に置かれていることに変わりはない。しかし、宗門に対する信が失われたとき、彼は立つべきところと進むべき道を失った。ここにおいて、彼は心情的に真宗を離れた、と考えられるのではないだろうか。

八月、関信三はプロツケレーを去り、ロンドンに戻った。彼がロンドンに移ったのは、帰国を念頭に入れたことであろう。彼が最後に白華を通して渡されたのは、一三三〇フラン。辛うじて日本までの船賃に足りる額である。現如は、関信三のこれ以上の留学を、望んでも認めてもいなかった。日本から援助があったか、現地で借金をしなければ、経済的余裕はまったくなかった。彼はそれからおよそ三か月ロンドンにとどまっているから、何らかの方途を得たもの

か。その間の記録は皆無である。経済状況からみれば、学校に入ったり、個人的に教師について学んだりした可能性はほとんど考えられない。資金が許さざりぎりまでロンドンに滞在し、十一月、関信三は英国を後にした。

次回は、帰国した関信三が幼稚園に出会うまでを書いてみたい。

#### 註

関信三の洋行中の主な資料としては次のものがある。

松本白華「航海録」〔真宗史料集成〕第十一卷維新期の真宗  
同明舎出版 一九七五

成島柳北「航西日乗」・「柳翁洋行會計録」〔明治文化全集〕  
第七卷外国文化篇 日本評論新社 一九五五

いま、子どもたちは

## 子ども集団を見ていて感じること

— 児童館での様子 —

秋庭 智子

「ねえ、あつきー、今からドッジボールするから、審判してほしいんだけど」「うーん、自分たちでやってごらんよ。いつも遊んでるからルールはわかってるでしょ」「えー、でも……」「何かあったら、すぐ行くからやってみて」。このように送り出した私の頭の中には、他の子どもとの

ゲームの約束と、ルールが十分に定着している遊びなので大人の目がなくても楽しんでほしいという願いがありました。様子を気にしつつ、横の空間で遊んでいたところ、十五分もすると少しずつ雰囲気が怪しくなり一人二人と遊びから抜けていき、残ったメンバーも殺気だって「今のは、絶対

アウトだ」「いや、そっちもさつき、ずるしたから、セーフだよ」「はあ？　ばかじゃないの、何いってんの、アウトなんだよ」「うるせー」と言い合い、ついには殴り合う事態になってしまったのです。

先程私のところに審判を頼みに来た子が、「ほらね、だからあつきーにいったじゃん。ちゃんと見ててよ」と、不服そうに訴えてきます。「横で遊んでて、わかったよ。R君とM君は当たつても、『今、タイム中』とか、勝手に『セーフ』とか言つて、ずるいんだもん。あれじゃ、楽しくないでしょ。本当に強いなら、潔く認めてよね。R君やM君をアウトにして、自信をつけてる一年生がいつばいいるって、知ってる？　正々堂々と戦ってほしいな」。

それでも、低学年には、なかなかルールを守るということが難しいようです。目を離せばすぐに

ずるをしたり、明らかに力のあるチームわけで戦ったり、勝敗しか頭にはないのです。自分さえよければいいと、ドラえもんのなかに出てくるジャイアンのような子どもはどこにでもいるのだと、妙に感心してしまいます。

ところが、ここに高学年の子どもたちが加わるとちよつぱり様子が変化します。大人の話には全く耳をかさない子どもたちも、リーダー格の子どもの言うことは素直に聞いているのです。子どもたちは、遊びが上手で時には多少の荒っぽさも交えつつ集団をまとめていく、がき大将的な子ども



を通して、ルールを守ることやチームワークの大切さなどを自然に学び、成長していきます。

一年生のS君もドッジボールは強くガッツのあるタイプでしたが、アウトになっても絶対認めず、わがままなところがあつたので周りからは迷惑がられていました。本人もなんとなく疎外感を感じていて、少し落ち込んでいたのですが、相変わらず自分の思い通りに遊んでいました。それに気づかせようとする大人のいうことには反発するだけです。私たちは「嫌われてもしかたないね、自分が気づかない限り変わらないね」、そんな話をしながら様子をみていました。

それがある日五年生のK君に「S、おれのチームに来いよ」とかわいがってもらうようになりました。K君に、「最近S君のこと面倒みてくれるようになったね。すごく喜んでたよ」と話すと、「あいつ、みんなから嫌われてるんじゃない。だから……」。

「うん、そうなんだよね。心配してたんだ」「まあ、Sがわがままだからしょうがないんじゃないの。俺がいつとくよ」との答え。そんなことがあつてから、S君のわがままぶりは少し影をひそめ周りにも受け入れてもらえるようになったのです。

でも、本当に私がうれしく思ったことは、実はK君の成長で、「ずいぶん大人になったね。覚えてる？ 昔はS君みたいだったこと」「えー？ しらねーよ」「S君も早くK君みたいになつてくれるといいな」、そんな会話ができるようになったことなのです。

このように、児童館で子どもたちと接していると異年齢集団のなかでの子どもの成長が、よく見えてきます。ただ、最近の子どもたちは忙しくて、高学年になると塾、習い事が多く、児童館に来たときぐらひは、ゆっくりりばーっとさせてくれ

という子どもが多く大人の期待どおりには集団が形成されません。たとえ二十人子どもがいても、四、五人の小さなグループで自分たちだけの遊びを展開していることも少なくありません。

そつとしておいて欲しいという気持ちは、普段元氣よく遊び回っている子どもたちがポロリともらすつぶやきの中からも読み取れます。「一、二年はいいよな。あの頃は、楽しかった」「赤ちゃんはいいね。のんびりできて」。わずか十二歳の子どもが言うせりふなのかと、思わず聞き返してしまいました。また、高校一年生の子どもたちが高校中退について話をしている中で、「俺は絶対しないな。今の生活には満足していないけど、ここまで十何年間積み上げてきた人生を全部パーにして、やり直すなんてやだ」と明言する子もいて、これもせつない気持ちにさせられました。

思った以上に不自由な思いをしている彼らに無

理やり集団での遊びを提案するわけにもいかず、児童館で出来ることは何だろうと、考えてしまいます。それでも、何人かが集まり楽しそうに遊んでいると「何やってるの？ いれて」とやって来ます。さっきまではゲームボーイやカード交換をしていたのに、楽しいことには敏感です。

中には、自分から「入れて」と言えず、そばでじつと見ている子もいます。仲間に入れてもらえなかったら……とか、入っても自分には出来ないかもしれないと、恐れているのです。実際子どもたちは、友達の失敗や出来ないことに対してかなり責め立てることがあります。「初めてだから、教えてあげてね」「出来なくても大丈夫」、そうやって声をかけないと、友達への配慮ができない子が多く、また一度いやな思いをしたらそこから逃げてしまう子もたくさんいます。

子どもたちをみていると、自分の気持ちを伝え



る、相手の気持ちを理解する、そのやりとりがもつともつと必要だと感じています。殴り合うほどのけんかをしているので、どうしたのかと聞いてみても一方は全く理由が分からないということもあります。そんなはずはない、こんなに怒るからには理由があるはずともう一方にきくと、「ずっと前、学校でぶつかったのに謝らなかつた」とのこと。「そのときには、何も言わなかつたの?」「うん」「あのね。そういうときには、その場で自分で相手に伝えないと分かってもらえないよ。言えば、相手だつた謝ってくれるはずだよ」。こんな些細な事が原因だつたのかと、驚いてしまいます。

子どもが集まれば、それだけトラブルも増えます。自分たちで「暴力せずに口で言え」「今のはどっちも悪いんじゃないの?」と解決できる場合もあれば、大人が気持ちの橋渡しをしてあげない

といけないうちもあります。子ども自身が、いろんな友達がいいて、いろんな考え方があつて、一人ひとりが大切な存在であることをたくさんの子どものうちの中で学んでいくことが大切だと痛感します。

また、仲間といることでもいろんなことにチャレンジする機会も増えます。新しいことや自信のないことは上手に避けて通る子どもが多いなか、一緒に遊ぶ友達の影響は、絶大です。ある日T君が「ドッジボールが嫌だから、児童館に行きたくない」と言い出して、私は正直「まいったな」と思いました。T君は線が細く、一学期は母と一緒に



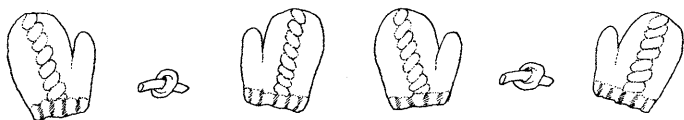
登校し授業を受ける毎日だったので、児童館での様子も注意深く見守っている矢先だったからです。でも、T君は友達の間では結構仕切って遊んだり、ドッジボールも一年生同士では遊ぶこともあったので、二、三年生の迫力に圧倒されて入っていけないのかな？ 決して弱い子ではないのにな」と、はがゆく思っていました。

強制的に年上の子どもたちとのドッジボールに参加させる気もなかったのですが、本人がどうしても気にしているようなので、「こっそり練習する？」と誘いかけると喜んで始めました。そこへ二年生のR君が「何してんの？ 俺もいれて」とやって来たので理由を話すと「それなら、俺が特訓してやるよ」ということになり、めきめき上達し、いつのまにか高学年とのドッジボールにも加わるようになりました。「僕はドッジボール強いよね。いつか、二年生も倒せそうだ」と眼を輝か

せています。あまりに無理のある話でしたが、「よかったー。楽しくなったんだね。R君のおかげだね」と言うと、「うん。あれからいつも一緒に遊んでもらってる」と笑っていました。

どんなに大人が環境を整えても、最終的には子ども自身が成長していかなければなりません。気持ちを受け止めてくれる大人と違って、お互いに傷つけ合うことも多い子ども集団ですが、時々大人が援助することで自分たちでコミュニケーションができるようになればよいと思います。児童館の中で、たくさんの子どもたちが出会い、集団を通して成長していくてくれることを願っています。

(大田区立東嶺町児童館)



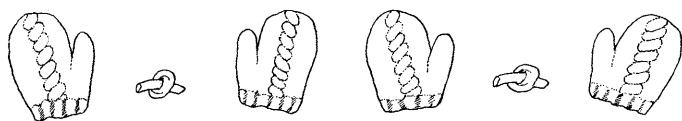
## 私が幼児教育を志した頃(15)

津守 真

私は米国留学中、米国の家庭に一月ずつ泊めていただいた。毎月引越すのは忙しくもあったが、新しい家族と知り合う好奇心のほうが大きかった。

### コルレット家

五番目の家庭、コルレット家は、ミネアポリス市北部の勤労階級の住宅地域だった。一九五二年五月十日、私はコルレット家に移った。コルレット氏は軍の空港で大工をしていた。家族は五年生のトミー、二年生のマギー、幼稚園のチャックと、コル

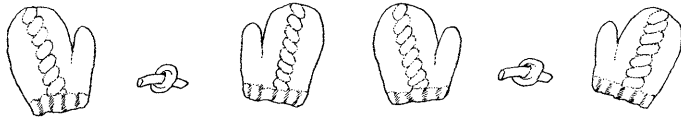


レット夫人で、夫人にはもうじき赤ん坊が生れるので大きなお腹を抱えておられた。コルレット氏はユニテリアン教会（自由神学の一派）で夫人はカトリックだったが、結婚するときにふたり一緒にプロテスタント教会に移る決心をした。アメリカ人にとっては大きな決断である。このことを夫妻は私に会うなり話された。結婚に当たって二人で同じ信仰をもつて新しい生活を出発せようという共通の意志を私は感じさせられた。二人とも教会の日曜学校に熱心で、日曜日ごとに家族で朝早くから教会に飛び出して行った。

コルレット家には寝室が四つあった。私の滞在中は下の二人の子どもが一緒にの寝室だったことになる。私はそんなことに気がつかずに泊まっていたが、一時的とはいえ、西欧人にとってはこれも大変なことである。私のために家族ぐるみで協力していた。コルレット夫人は近隣の人たちと垣根ごしに始終おしゃべりをしていて、そのたびに私は紹介された。コルレット氏は毎日家に帰ると地下室で大工仕事をして自分の新しい家のガレージを作っていた。

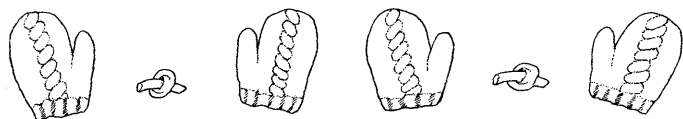
子どもたちはカブスカウトに入っていて、絶えず友達が出入りして、玄関前のポーチと裏庭は近所の子どもが溢れていた。

両親は教会の委員会の会合で頻繁に夜外出したので、近所の高校生のナンシーがベ



ピーシッターに来了。そのときは大騒ぎで、いつもはベットに入って十分もすれば静かになるのに、漫画を見るといつてきかない子、足を洗わない、パジャマに着替えな  
いと言ひ張る子、それにナンシーが加わつて枕を投げたり騒ぎが大きくなる。この子  
たちはじつによく喧嘩した。私も始終その中にひきこまれた。ナンシーには弟がふた  
りいた。父親の口笛がひとつ鳴ると末の子が、ふたつ目の口笛で次の子が、三つ目の  
口笛でナンシーが家に帰つた。ナンシーは活発で明るい少女で、稀に子どもたちが早  
く寝ると私共は学校の話をした。

コルレット家に行つて間もないある晩、私はバスルームに水を飲みに行った、マ  
ギーが二階の廊下で漫画を読んでた。ベッドで電灯をつけてはいけないことになつ  
ていたので、小学校二年生のマギーは両親の目を盗んでベッドを抜け出してバスル  
ームの電灯で漫画を読んでたのだつた。私が出会つたら急いで部屋に帰つて行つたの  
で私は悪いことをしたような氣になった。しばらくしてコルレット氏の足音が聞こえ  
た。私が自分の部屋に戻つたら、マギーはまた出てきてバスルームで読んでた。コ  
ルレット家にはこの後二人赤ん坊が生れた。

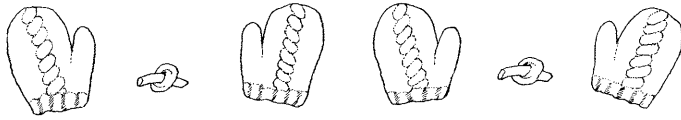


## 朝食

コルレット家の朝食は毎朝きまつてパンケーキだった。コルレット氏が鯛焼きのよ  
うなパンケーキ型にメリケン粉をといて焼き、上手にひっくり返して皆に配る。皆は  
フォークを手にして順番を来るのを待っている。食べ盛りの子どもたちだからとても  
忙しい。

家族が食べている間に、コルレット夫人は皆に弁当のサンドイッチを作る。へたつ  
きのパンを大ざっぱに切り、バターとジャムと、人参やプロコリーをはさみ、紙袋に  
いれ、皆それをもつて学校に行く。前夜がローストビーフのときには豪勢だった。バ  
ターとジャムだけのときもある。私もその袋をもつて大学に行った。コルレット家の  
子どもたちは、午後になって学校や幼稚園から帰ると鞆をほうり出して遊びにいっ  
た。コルレット夫人はその後始末をし、洗濯をし、それは忙しい。いつも背筋を伸ば  
して子どもの名前をひとりずつ呼んで、何か言っていた。

ある日、私が遅い時間に大学に行ったとき、コルレット夫人が階段の途中に腰掛け  
て泣いていた。知らずに私が通りかかった。一瞬立ち止まった私に、こんなところを  
見せて恥ずかしい、昨日姑が来たのだという。階段に座ったまま、長い時間話を聞い  
た。いつも気丈な人にこういうときがあることを知り、どこの国にもかわらぬ人間関

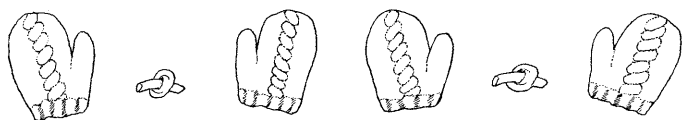


係を知らされた。

冬は雪に覆われたミネソタは夏が急にやってくる。エルムの並木が緑になると爽やかで、人々は戸外に出てくる。並木の間から、子どもの声がして、私の名前が呼ばれる。立ち止まって言葉をかわす。子どもから呼ばれるのは本当にうれしい。ライラックの紫の花が風に揺れる。毛せんを敷き詰めたように無数に咲いていた黄色いたんぽほの花が盛りを過ぎると、桜の花が散るみたいに綿毛が空に舞う。

### 当時の米国の大学

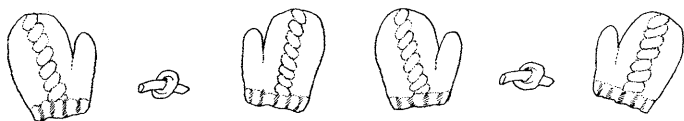
米国に来てから半年が過ぎて、私の大学生活も落ち着いてきた。児童研究所で長く所長だったドクター・アンダーソン、言語発達の研究をしていた女性教授ドクター・テンプリン、私の指導教官であるドクター・ハリスなどから、夕食に招かれるのも留学生にとっては、励みになった。一九五二年五月末、ハリス先生から週末を北ミネソタの湖のコッテージに行くが一緒に来ないかと誘われた。ハリス先生夫人も一緒に半日かけてドライブした。ミネソタ州は一〇、〇〇〇の湖があるとされる。殆ど人も通らない道に、その年は毛虫が異常発生して、それを轢いたタイヤが空滑りして自動車が進けなくなった。そうすると私たちは車からおりて後ろから押してようやく目的



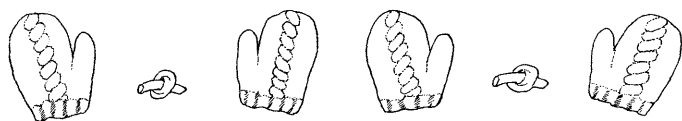
地に着いた。ルーン（鳥の名前）が泳ぎながらクーン、クーンと鳴いている。栗鼠が木々の間を跳び移る。鏡のような湖にスカールを浮かべて、三日間を過ごした。湖畔一帯、松と白樺の林で人影を見ることがもない。とんぼが一杯飛んでいる。湖のすぐ脇のベンチに腰掛けて夕陽に光る美しい湖水を眺めて日本を思った。この付近だけで小さな湖が数百あるという。ひとつの湖を三十家族位で持っていて、人々はここに来ると電気もガスもなく原始的に生活をして過ごす。

夜になると、炉に薪をくべ、ランプに灯をつけて、暖炉の火にあたりながら話した。このコッテージは、一九三七年版スタンフォードビネー知能検査で有名なターマンの共同研究者であるメルルが、引き籠って仕事をしたところで、その後ハリス先生が譲り受けたのだという。その頃、科学心理学は数量化にエネルギーを注いでおり、知能検査はその強力な道具だった。知能検査というと、日本の学校の偏差値問題进行起こすが、それはずっと後のことで、それよりもむしろ知能の恒常性、検査の信頼度、発達に及ぼす遺伝と素質の影響等の理論的関心が主であった。大学の講座でもディファランシャルサイコロジー（差異心理学）は人気のある分野だった。日本ではあまり関心を持たれなかった分野だが、少壮の心理学者ドクター・ジェンキンスの教室はいつも学生が一杯だった。知能検査を利用した数量研究は当時の児童心理学の主





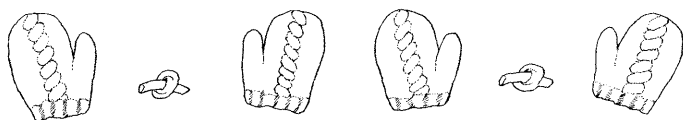
流だった。行動心理学はまだ緒にいたばかりだった。米国でのピアジェ流行のきっかけをつくったのはミネソタ大学のフラヴェルだが、それも十年後のことである。ミネソタ大学児童研究所は、一九二〇年代にロックフェラーによって創設されたアメリカの七つの児童研究所のひとつで、メアリー・シャリーらの地味な縦断研究はこの人たちの誇りだった。子どもの日常の行動を対象とした研究にこここでふれたことは私にとっても幸いだった。これは生れて間もない乳児から、定期的に子どもを観察し、親にインターヴューして、子どもの発達の筋道を具体的に明らかにしようとした研究である。ハリス先生は、当時児童研究所が課題プロジェクトとしていたグッドイナフの描画による知能検査改訂の一部を、私のマスター論文にしないかとすすめられた。それはアメリカの心理学の研究法を实地に学ぶいいチャンスだと思ったが、私はむしろ、日本にいたときに疑問をもっていたひとつのこと、米国においてフレイベルがどのように批判され、進歩主義教育にかわったのかを、実際の、歴史的に追求したかった。これは日本では資料の得られない分野だった。こんな問題はアメリカの学生の関心外のことだった。私はハリス先生にこのことを話すと、自分だったらあなたが言うように、せっかくアメリカまで来たのだから、腰を据えて自分の関心を追求するだろう言われた。異色のことだけれども、私はこの後、図書館と付属のナースリース



クールにもぐりこんで幼稚園の歴史にエネルギーを注ぐことになった。ずっと後に、一九六八〜一九六九年に、ハリス先生がフルブライト交換教授でお茶の水女子大学で半年間講義をされたとき、附属幼稚園を見て、アメリカに失われた懐かしい幼稚園の空気だと言われた。そしてこの幼稚園を絶やさぬようにと何度も言われた。ハリス先生はペンシルヴァニアでいまでもご健在である。二〇〇〇年の秋に、現在の附属幼稚園副園長の榊田さんから頂いたお茶の水女子大学附属幼稚園の四季の絵葉書を送ったところ、それを非常に喜ばれた。

### アメリカインディアン

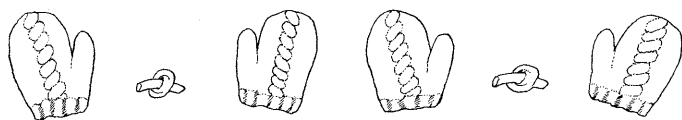
ハリス先生のコッテージに三日間滞在の後、帰途アメリカインディアンの部落に立ち寄った。アメリカインディアンは髪の色も眼の色も黒くて、日本人の顔に似てる。私を見ると子どもたちがすぐに寄ってきた。当時、ところどころにインディアン保護地区があり、服装や住居もむかしのままに、いわば原始生活の展示場のようになっていた。土産物屋が並んでいた。私は日本人の先祖の生活を見たような気がして、心が痛んだ。このときの印象のせいだろうか。私は米国滞在中に北川台輔先生が主催されていたアメリカインディアンの集會に何度もいった。都會に憧れて出て来たインディ



アンの青少年の生活が退廃するのを見て、北川先生は日曜日の午後、日本人教会で食事やレクリエーションの会合を開き、生活の相談にのつておられた。何人もの私の知っているアメリカの婦人たちがこれに協力していた。これから五十年の間に米国の社会はこの点で驚くほどの変化を遂げた。マイノリティの差別の問題と取り組み、一九九〇年代末には国連は国際先住民年を定めるほどになった。私は米国を訪れるたびにそれを見て驚いた。特別に大きな運動をするというのではなく、さりげなく日常的に、沢山の人たちが疑うことなくこのことに力を注いでいた。米国には多くの問題があるが、この点ではこの半世紀に米国の社会は進歩したと言ってよいと思う。日本がバブルの時代のことである。

「かわいそうなインディアン。いったい現代文化ってなんだろう。まるで動物みたいに白人に駆り立てられて、逃げ回って、そして見世物になって、かわいそうなインディアン。」と私はその日の日記に記したが、五十年の間にすっかり変化した。

私がコルレット家にもどった翌日は教会で「子どもの日」だった。いつもより少し良い服を着た子どもたちと一緒に私は朝早くから教会に出かけた。私が小さいときから耳に懐かしい讃美歌、「再び主イエスのくだります日、召さるる幼子み国にて、み空の星と輝きつつ、主のみ冠の玉とならん。」が歌われた。そんなときコルレット夫



妻は大張り切りだった。

コルレット氏一家は、第二次世界大戦が終わったとき、占領軍として仙台に駐屯していた。そのときの焼け野原の日本を見て、心打たれたという。私がコルレット家にお世話になっていたのは日本がまだそこから立ち上がれていない時期だった。

その翌日六月九日に、ソニーの井深さんがミネアポリスに來られた。倉橋惣三先生のご長男倉橋正雄さんはソニーの創設者のひとりで、私は愛育研究所の古い円盤録音機を使えるようにしたいと思い、それをかかえて井深さんと倉橋さんを目白に訪ねたことがあった。そんなご縁で早くから井深さんが來られるのを待っていた。ミネアポリスからバスで一時間ほどかかるセントポールホテルに井深さんを朝早くに訪問した。勿論ソニーの看板もネオンサインもアメリカの町に見られなかった時代である。

# 目をこらひて (11)



私は、詩が好きです。詩を声に出して読むのは、特に好きです。体が求めている！という感じで、読みたくなってしまう時があります。

帰り道に何気なく寄った本屋で、大好きな川崎洋さんの詩集を見つけて買いました。うれしくてうれしくて、夕食の後で、誰に聞かせるという訳でもなく朗読を始めました。すると娘の目がきらりと光り「かずほもね、詩を作ってるんだ」そう言うのと、自分の詩を語り始めました。

## 『いるかさんのショー』

すいぞくかんに いった

いるかのショーをみていたら

いちばんまえのせきでみていたら

さいごに、みずがジャーツとかかった

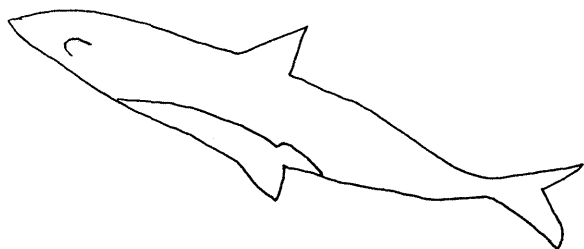
おきにいりのスカートできていて

そこにきたないみずがかかって

とても さみしかった

とても かなしかった

とても つめたかった



絵と文 宮里暁美 (目黒区立ふどう幼稚園)



# 耳をすまして

私が、いい気分で詩を朗読していた時の雰囲気そのままに、娘も、抑揚をつけて、「とても」の三連の部分はテンポを上げて、最後の「とてもつめたかった！」はクライマックスの盛り上がりをつけて語っていた。

朗読という方法を通して空間の中に投げ出された詩のリズムが、娘の体の中に入り込み、娘の体験と結びつき詩という形になり、こうして語られている。そんな驚きに包まれて私は、娘の言葉を書き留めた。

## 『かたつむりさんのさんぽ』

げつようびに、あめがふっていた

ともだちのおうちにいこうとしていたら

わたしは、かたつむりさんをみつけた

はじめは、一ぴきだけつかまえた

かえりに、二ひきをつかまえた

一ぴきだけ ちいさかった

二ひきめは、からがとれそうになってた

三にんあわせて、いっぱいうちがたまっていた

あらうのが たいへんでした



# ラオスという国で出会った子どもたち

小林 美実

似ている、なんて似ているの。そっくり！ ラオ

スの首都ビエンチャンの子どもの図書館で初めて  
会った子どもたちの中に、日本の子どもそっくりの  
顔を何人も見つけた。今まで訪れたアジアのどの国  
よりも私たちに似ている。大人もそうだ。私は自分  
の先祖はラオスから来た、と確信してしまった。何

だかなつかしく、また、不思議な気持ちになった。

ところで、ラオスと言う国については、日本では  
まだ旅行する人が少なく、実情が知られていない。  
かの有名な旅行案内書の『地球の歩き方』でさえ、  
初版が今年六月にやっと出たのだ。この本にも外務  
省の「注意喚起」の文があって、今回八月の人形劇

公演に際しても、手配を頼んだ旅行社からも「乗らない方がよい、という国内線の飛行機に乗らないわけでもないし」と言われてしまった。と言つて陸路は強盗集団が出没する。おっかないけど、空を飛ばうと決心する。ところが出発直前に、又、首都の市場で爆弾テロ。覚悟しての出発だった。

ところが訪ねてみると、実にのんびり、ゆったり、時間までゆつくり過ぎて行く国だった。人々はおだやかで親切。特に笑顔が良い。ラオスの仏像のやさしい表情に似ている。しかし経済的に発展しているタイのバンコクからこの地に入ると、ヴィエンチャンは首都だと言うのに、黄土色の土ぼこりにまみれた貧しい街や服装等におどろかされる。三、四階以上のビルは稀で、中心街の道路も、舗装がしてあるのか、こわれたのか、よくわからないガタガタ道である。ちよつと車で走れば、すぐ水田や畑、荒

地。三十年前のマレー半島やタイの田舎が思い出された。

先ず訪れたのは国立図書館の子ども図書館だった。国立と言つても、古い木造の二階建の、昔の学校か役場の様な所。その横の溝にそつた細道をぬけて後にまわると、平屋の木造家屋がある。これが子ども図書館だ。辺りには民家もあるが、どれもトタン屋根、板をうちつけた壁、凸凹の土間と言う粗末な家だ。鶏があたりを駆けまわっている。でも子どもたちは人なつこく元気だ。私たちを見ると、どんだん出て来て、皆いっしょに仲良く写真におさまった。その嬉しそうな顔顔……。何て素直なんだろう。貧しさなんか吹きとんでいる様だ。

ここでとても嬉しいことがあった。建物の横に「T市子ども移動図書館」と日本語で書いてある古いバスが停っていた。舞台設営後でいっしょに来た





▲手遊びをする子どもたち ビエンチャンの「ラオスの子どもに絵本を送る会」の図書室で

T市の公務員のY氏が「あった、まだ動いているんだ！」と喜びの声をあげて車体をなでた。十数年前、市に立派な図書館が出来て不用になったこのバスを、大変な苦勞（各役所や団体の諒承を得るのに）の末、プレゼントしたものとかが。他にも六十一台、中部の地方市のバスもあった。日本で簡単にスクラップにしてしまうものが、こうしてお役に立っている。もっと沢山の物が日本では捨てられている。こうして生かされている姿を見ると、嬉しいだけでなく、反省させられる。

図書館と言っても、二十畳位の部屋。粗末な書棚や書架、座卓が雑然と置いてある。隅の一角がスタッフの場所で、そこにはTVとビデオの設備があった。まだ公演までに二時間もあると言うのに、幼児や小学生位のシン（巻きスカート）をまいた子どもが十人位座って待っていた。まず室内を片付

け、清掃、そして舞台設営を始めるのを、珍しそうに静かに見ている。だんだん子どもが増えてくる。見るからにイタズラっ子らしい元気な男の子も入って来て、さっそく体をくつつけあいふざけて笑いあっている。日本で少なくなった「じゃれあう」遊びである。公演がはじまると、本当に素直に、嬉しさを表情と体いっぱいにあふれる様に表す。真剣にみつめたり、声をあげて笑ったり答えたり、一緒に歌ったり、反応が豊かだ。目が大きくキラキラしている。歯が真白だ。どの子ども体もがしまってみえる。

次は、日本の「ラオスの子ども」に絵本を送る会（ASPB）の現地事務所にある図書室での公演だった。前の場所よりやや広い部屋だが、中央に柱があり、多少見にくいかと心配したが、子どもたちは頭や体を左右に動かしながらも、一生懸命見てくれた。ここには日本からの絵本が沢山あり、ラオス



▲メンバーと一緒に踊る子どもたち ルアンパバーンの子ども文化センターで

語に訳された紙が貼つてある。日本からも時々スタッフが来られ、現地のスタッフと共同で、大変熱心に活動されていることがわかれた。

ヴィエンチャンでは珍しい立派な三階建の「青年の城」でも公演した。旧ソ連時代に社会主義国のあちらこちらにあった「子どもの宮殿」の様なものらしい。小学生から青年期までの青少年が集り、学校とは別に、学んだり運動をしている。ここでもサッカーと柔道は人気の様だった。唯一、整ったステージでの公演で、子どもたちの年齢も、小学生中学生が大部分だった。それでも本当に素直に喜んでくれた。

その朝、世界文化遺産に登録された寺の町、ルアンパバーンへ飛んだ。メコン川にそった山あい的小さい静かな町は緑が美しく、土ぼこりにはまみれていなかった。いたる所に寺があり、朝六時には、あ

ちらこちらの寺から、だいたい色の僧衣をまとい、はだしに黒い鉢を手にした僧侶の列が静々と歩み出て来る。朝靄の中、道端にひざまづいて座る女たちから、一日の食物の喜捨をうける。その僧侶の中には、小学生位の子どももいる。一時期、仏教が否定された時代があり、それによって仏教精神は相当失われた、ときいたが、私たちの目から見ると、まだまだ立派に存続している様に感じた。

今は、仏門に入ること、年齢も、期間も、相当自由らしい。しかしその修業は大変厳しいようだ。お金は一切持たず、物は支給される僧衣、袈裟、傘、鉢、サンダル位のもの。食事も、夜明けの托鉢で得たものを、朝と昼二回だけで、その日は水も飲めない。物欲にまみれた今の日本人には、とても耐えられない生活だ。ここの子ども文化センター（とにかく粗末な長屋風の建物。ここは子どもたちがと

び歩くので、土ぼこりだった）で公演した時、頭をすってまる坊主にした中学生位の男の子がいた。どうしても人形がやった手品を一つでいいから教えてくれ、と言って、懸命に練習していた。彼は寺の修業を終えたばかりとのこと。寺で修業したことを誇りに思っているらしく、そのことを私たちが知ったとわかると、嬉しそうにうなづきながら、真剣な顔つきをした。生きること自信を持ったのだろうか。

文化センターでは、小、中学生による人形劇サークルがあり、その劇を私たちに見せてくれた。人形もストーリーも音楽も、すべてこの地に伝承されているものの通りとのこと。それを大変誇りに思っている様だった。年齢の高い子どもや大人は真剣にみていた。ここから幼児や低年齢児童のための、子ども文化としての人形劇を創り出すためには、まだまだ



▲人形劇をする子どもたち ルアンパバーンの子ども文化センターで

だ時間がかかるだろうし、そのためには、多くのその分野の情報を得る必要があるだろう。但しその時は、この町の、この国の、持ち続けている静かなゆったりした生活がくずれる時かもしれない。社会主義と仏教が共存している、この珍しい国の将来を複雑な気持ちで描いてみた。

町の中央にある仙人伝説の山、プーシーのふもとに、周辺の山岳地帯に住むモン族が、毎日市場を出している。タイなどの産物として知られる、黒い布に美しい色の布切れや糸でかざった小さいバッグなどが売られている。ここで小学生位の小さい女の子が、竹を組んで作った床に座ってせつせと針を動かし、品物を作っている姿があった。社会主義体制の中で全国に学校は建ったが、実際にはどこでも学校に通わない子、途中で止めて家事を手伝ったり働いたりしている子どもが多いとのことである。大学進

学や留学するなどは、ごく限られた一部の人たちにだけ可能なのだ。

最終日、クアンシーの滝を見物に行った。この滝は、さまざまな形に浸蝕された岩壁（石灰岩）を激しく流れ落ちる水の様に、思わず歓声をあげた程、迫力といい、雄大な美しさといい、すばらしかった。他に見物客も無いことも幸いだった。ここまで一時間余の山道は、国道と言うにはお粗末な、ガタガタの狭いじり道。途中、美しい棚田をいくつも見た。そして小さい集落も通った。しかし、途中から電柱がなくなり、どの集落も電気が来ていないことに気づいた。少し大きい平屋は小学校らしい。夕方の学校には、人の気配は感じられなかった。

帰り道、少し薄暗くなった山道で、農器具や作物をかついだ夫婦に何組か出会った。幼い子が、夫婦のまわりを先になったり後になったりして歩き、そ



▲みやげ屋で品物をつくる子ども ルアンパバーンのモン族の市場で

れに声をかけている若い母親の姿が印象的だった。わんぱく坊主の五、六人の群（？）にも会った。棒をふりまわしながら、家の方へ元氣にかけて行つた。昔、私が子どもの頃、東京の中野あたりでも見られた風景である。なつかしく思い出していた。

貧しいけど、幸せであるのだろう。ラオスは暑い国。だから、衣と住は最低限あればいいのだろう。食は自給自足。しかしやがて清潔で快適で、豊かで便利な生活を知った時、皆がそれを望み、生活が変った時、その時、子どもたちの目の輝き、歯の白さ、素直な気持ち、素朴な明るい心などが失われてしまふとしたら、残念なことである。子どもたちの姿から、生き方、幸せなどについて考えさせられることの多いラオスの旅だった。

（鶴見大学短期大学部）



# こころをあわせて

佐藤 寛子

二期の始業式、園長先生はこどもたちに  
「力をあわせること」と「こころをあわせるこ  
と」のお話をされた。運動会、遠足、おもちつ  
き……と行事が盛り沢山の二期期である。みん  
なで力をあわせ、心をあわせて過ごすことの太  
切さを感じ、私もお部屋に戻ってもう一度こど

もたちに伝えた。けれど、いまひとつ伝わった  
という実感が待てない。よくよく考えてみると  
分からないのだ。「こころをあわせる」ってどう  
いうことなのか? 「こころ」って何だろう?

四月、林の組のこどもたちと初めて出会っ



た。三歳からの持ち上がりの十九人と、新しく入園してきた十六人の総勢三十五人のこどもたちである。受け持つことになった私も今年度からである。それぞれ、大切な時間を過ごしてきた。ここでの出会いが、今までの時間につながり、未来へと拡がっていきけるようにと願い、一学期を過ごしてきた。

二学期を迎え、幼稚園の場に慣れ、周りの様子も見えてきて、こどもたちは実に良く遊ぶ。砂場、園庭はもちろん、一学期はあまり行かなかった遊戲室、コート室も自分たちの場になってきた。長いお休みの間の体験や幼稚園でのいろいろな行事、クラスを越え年齢を越えた様々な人との関わりを通して、遊びも人との関係もずいぶんと拡がってきたことを思う。

それと同時に、もめごとやぶつかり合いがい

ろんなところで頻繁に起こるようになってきた。どれも、小さな気持ちの食い違いや表現の拙さからくるものなのであるが、そこで交わされる言葉のやりとりで、傷ついたり傷つけられたりして、周りにいる人みんなが何となく嫌な気持ちになる。毎日のように繰り返されるめぐもごとにつきあいながら考える。私は彼らに何を伝えたら良いのだろうか？

＊

ある日のこと、園庭の太鼓橋の下にござが敷かれ、普段はあまり一緒にいない三人組（Ｙ、Ｋ、Ｄ）が並んで座っている。どうしたのだろうと思う、近づくと、一人は涙のあとがほっぺにうつすら残っている。

Ｙ「ぼくが、お砂場で入れてって言ったたら、Ｔ





くんがダメって言って、ぶづづって言ったんだ」

K「それでね、Yちゃんが泣いててね、かわいそうだから、ここにおいでって入れてあげたんだよね」

D「うん」

私「そう、それは良かった。でもYちゃん悲しくなっちゃったわね。Tくんどうしてそんなに言い方したのかなあ」

私は砂場で遊んでいるTを見ながら、彼が今朝珍しく私に抱きついてきて、こっそり、「昨日、デイズニールランドに行ってきた十一時に寝たから疲れてるんだ」と言っていたことを思い出した。

Y「Tくんてさ、自分では言うくせに、誰かに言われるとすぐ泣いちゃうんだよね」

K「そうだね」

私「そうなんだ。どうしてかなあ」

少し考えてから、

Y「きつと、ところがやわいんだよ」

私「そうね、誰でもこころが少し弱くなっちゃうことってあるよね。そういうときは、みんなで助けてあげようね。Yくんも、KくんやDくんに助けてもらったものね」

そんなやりとりの後、お片付けの時間になり、私は砂場でTたちと一緒に道具を片付け始めた。お隣のクラスのM先生も応援に駆け付けてくれて、

「さあ、こころをあわせて片付けようー」と声をかけてくださる。その様子を見ていたY





が太鼓橋のところから走ってきて、たらいの水で道具を洗っているTの横に同じようにしゃがんで道具を洗い始めた。黙々と洗い続けながら、

Y「Tくん、さつきはごめんね」

T「ほくも、ごめんね」

M先生の声が聞こえる。

「わあ、なんかいいなあ。いい感じ」

——こころって何だろう？　こころをあわせることってどういうことだろう？——

\*

「さとうせんせい、ボール遊びしょ」

Nは最近大人を相手に遊ぶことが多い。何人かの人が集まって遊んでいる場に入って行くことにひどく慎重な彼は、「入れて」と言っ

「だめよ」と返されることが多い。彼の慎重さが余計に周りの人たちの気持ちを揺さぶるのだろう。どうしたらいいのだろうと思いつながら、しばらく二人でボール投げをしていると、年長組のRくんとE先生の姿が見える。Rくんは、Nと同じサッカーボールを持っている。Nは以前、Rくんとサッカーをしたことがあった。E先生がRくんに声をかけてくださる。私もNに声をかけた。

Rくんのパスはとっても優しかった。Nが取りやすいように考えて和らかいボールを送る。受け取ったNも優しく蹴り返す。二人のやりとりは見えていてもこころが安らぐような時間であった。そこへ、Yが加わった。林の組からRくんとNのサッカーの様子を見ていた彼は、「ほく、ドリブルもできるんだよ」



と自信満々である。RくんもNも気持ち良くYを入れるが、今までの優しいリズムを知らないYの蹴るボールは強すぎる。

「Yちゃん、もう少し優しく蹴って」

と、E先生も私も声をかけるが、間もなくNがスーッとその場からはずれ、また私に、

「せんせい、ボール遊びしよ」

と言ってきた。諦めずにその場を持ちこたえてほしいという願いから、

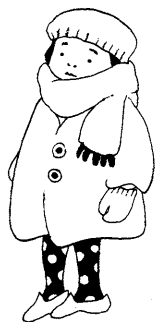
「Yちゃん、Nくんにパス！」

と言って、私はNの背中を押した。

——こころって何だろう？　こころをあわせるってどういうことだろう？——

\*

毎日のこどもたちとの生活の中で、私が意識



することで見えてくることはたくさんある。こどもたちはきつと感覚的に知っているのだらう。ひとりひとりの中にしつかりと「こころ」があるということ。そして、こどもたちは遊びの中で、自分とは違う相手とぶつかったり、認めたり、寄り添い合ったりを繰り返している。「わたし」のこころと「あなた」のこころは違うのだ。こころをあわせるということは、同じになることではなくて、それぞれの違いを尊重しながら、同じ時間や場所を共有することなのだろう。

保育者として私がすることは、みんなを同じ



ひとつにすることではなくて、違っていいということを伝えながら、時にはその場に踏み止まる勇気が持てるよう、時には相手のところに寄り添えるよう、同じ時間をともに過ごすことであるのかもしれない。そして、もうひとつ、保育者同志の、おとな同志のこころの在り方を意識することも必要であろう。

\*

園庭でクラスのこどもたちとリレーをしていた。そこへ、全体のこどもたちをみて下さっているT先生と年長組のこどもたちが何人かやってきて、

「ブーメランを作りたいので紙をください」と言ってきた。年長組のAくんが何日か前に林の組で作っていったのを思い出し、その時に使っ

た少し厚めの紙と、良く飛ぶブーメランの型を手を出しているMくんに渡した。園庭を見ると、T先生がリレーに入ってくださっている。Mくんと、後から加わったSくんのブーメラン作りを手伝った。

\*

私の中では、ごく普通の保育の場面であった。私とT先生の連携もうまくいっているように思っていた。ところがである。保育後の話し合いで、Mくんがブーメランを作ることになったのは、Aくんとブーメラン遊びがきっかけであったということが分かった。普段友達と関わることが少ないAくんを思い、T先生はAくんと一緒にMくんがブーメランを作ったら……と考えていたようである。けれど、私にはAく



んがそこにいた記憶がない。T先生の思いも全く分からなかった。話をしてみて初めて、T先生と私の間の食い違いや、その間に挟まれたAくんを思った。

こういうことは、日常の保育の中ではよくあることなのかもしれない。保育者の思い込みや保育者同志の連絡の行き違いは、きっと思っている以上に多いだろう。そのことに無意識でいられるのは、こどもたちが柔軟に対処してくれているからであろう。

その後、T先生ともう一度あの日の保育を振り返ってみることにした。T先生と私とがもう少し場と時間を共有していたらどうであったか。そこで出会うまでの、それぞれの時間の流れや、人との関係をお互いを感じる事ができたはずだ。そして、こどもたちの遊びがもつと

スムーズに流れたであろう。

保育者同志の連携は、この現場でも何らかの形で意識されていることである

と思う。私やT先生がそうであったように、保育後、その日の保育を振り返り、それぞれの保育者がさまざまな情報を交換していくことで新たに覚えてくることはたくさんある。けれど、話し合いが難しいのは、保育者それぞれが決して同じではないことにある。クラスを受け持っていたりいなかったり、非常勤であったり常勤であったり、経験があったりなかったり……顔が違いうように感じ方も考え方も違う。話し合いの結果が、それぞれの保育者の保育の評価に





なってしまうと、何のための話し合いかわからなくなるだろう。まずは、違いを尊重する必要がある。つまり、保育者同志もまた、「ここをあわせること」が大切なのだ。連携とは、それぞれの保育者がそれぞれの違いを認め合いながら、ここをあわせて保育の流れを創造していくことなのだと思う。

\*

十月も半ばを過ぎ、長くて暑かった今年の夏がやっと終わった。運動会での年長組のリレーは、ひとりひとりが自分らしく走り、次のひとへとつなげていく感動的なものだった。影響を受けた林の組のこどもたちの何人かは、このところ毎日園庭を走り回っている。相変わらず、誰が早い、誰が一番かで非常にもめてい

るのだが、どこからともなく「よい、よい！」の声がかかると、何事もなかったかのようになり、走り出すのは何とも可笑しい。

私は、ひとりひとりを尊重し、彼らと過ごしているこの場と時間を大切にしよう。そして、ともに保育をしている先生方とここをあわせて過ごしていこうと思っている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

# ハロー・ディア・エネミー！

平尾 美智子

私の家の小さな庭に、一鉢二鉢とふやしていった

鉢花が、今ではいつのまにか、五十鉢近くになっている。一方で私は幼稚園在職中に園の畑の実践に生かそうと、家の近くで畑作りを始めていた。二十年前に勤務していた幼稚園で担任した園児の父が、減反政策の一つとして、無償で土地を貸してくれた畑

である。

畑作りと草花を育てることを同時にやってきたが、水やり、霜よけなど、一つ一つの草花の生態をよく知り、こまめに育てなければ、たちまちのうちに枯れてしまう。それは子育てによく似ている。

二、三年前から山野草も育てはじめたので、また難

しくなった。三十年間、立山連峰の自然を守る会の運動をやってきた私は山野草を入れることに抵抗があったが、いつのまにか山野草の魅力にとりつかれてしまった。

二十年も前になるが、T短大附属幼稚園の創立にかかわった時、上司として、保育行政の官僚畑からA先生という大正生まれの五十代の女性が就任してきておられた。私のように幼稚園の中だけで育った保育者と違って、小学校の教師をした後、保育所の保母として勤務し、行政の中にも席をおいておられたキャリアの厚い先生であった。

A先生は口調はソフトであったが、いったん、激するとすごい形相で私たち職員を叱責し、なんとなく馴染めなかった。イタリヤのマリア・モンテッソリー教育観とメソッドを保育の中にとりいれることに情熱を注がれ、そのカリスマ的言動の中には、強い圧迫感があった。遊びの中で子どもの発達を考

えていこうとする私の保育観と違い、A先生は、手作業を中心とした課題活動を重視し、ごっこ遊びなどにも否定的であった。

その上、熱心のあまり、私たちにも私費でモンテッソリー教育のテプロマ取得を半ば強制的に促されたので、そのころ、主任教諭であった私は、A先生にまっこうから反対し、職場でよく口論した。そのため私は、村八分のような立場に追いこまれ、苦しみながら、京都の深草にあるモンテッソリーの研修会に毎週一回必ず行き、遠くイタリヤのペルージャへも赴いた。

だが、宿敵のような存在であったA先生も、熱意が嵩じて、若い先生の結婚や妊娠に際して、人権無視の態度をとられたため、かえって自分が退職せねばならぬ窮状に追いこまれ、就任後、わずか六年で退職なさってしまった。A先生の退職後、私がその後任となり、保育と園内の管理責任者としての任務



を負った。初めは解放感があつたが、しだいに孤独と苛立ちにさいなまれ、A先生の苦衷がよく理解できなくなった。どうしてあのか、A先生の長所を受け入れ、私が支えになつてもっと協力してあげなかつたのか。大学当局との予算の折衝、幼児教育学科との理論と実践の矛盾、特に教育実習についての保育現場の主体性の確立など、保育現場の責任者としての重責を思うとき、私がA先生にとつてき自分の態度に深く反省させられた。

それでも、創立後六年間は定員にすら満たなかつた園児数も定員をはるかに越え、クラスも増設した。大学や大学院卒の先生、男性保育者の採用など、新しい風を入れ、園は一定の軌道にのつて発展し、県外からの見学者も多くなった。こうして私も苦節二十一年、ようやく定年を迎えた。定年になつて、二、三年後のある日のこと、二十年ぶりにA先生から電話がかかつてきた。

「お元気ですか？  
一度、私の家に遊びにいらつしゃいませんか」

A先生はソフトな口調でささやくように言われた。

私は一瞬どきりとしたが、何かいいようのしれない懐かしさがこみあげてきた。

在職中、A先生の考え方と一致したのは、子どもと自然に対する考え方であつた。

特にA先生の花壇作りの作業の手順には目をみはるものがあつた。動物の放し飼ひも一致した考え方だつた。A先生と北海道へ旅したとき、目にした小川の囲いをヒントに、園庭に小さな川を子どもたちと共同で作つたのも、A先生の支えがあつての私の実践であつた。



誘われるままにA先生のお宅を訪れてみると退職なさつてすぐに、「モンテッソーリ子どもの家」を自宅で開かれていたが、その日は教具などは室内の片隅に片付けられていた。室内の中央の展示台には、見事に育てられた山野草の花々が飾られ、会のメンバーの人たちがA先生を中心に熱心に一つ一つの作品に目を注ぎ、語り合っておられた。そして、A先生の花をみる目は慈愛にあふれていた。

\*

現在、世界で紛争のおきている国が五十か国以上ある。民族内部の紛争が多く、その原因はかつてないほど、複雑になっていて、従来は紛争から外されていた子どもや女性が、最も大きな犠牲者となっている。昨年は国際児童図書年であり、私の所属しているJBBY（日本児童図書評議会）では、「平和、自由、寛容、反戦」の精神を謳いあげ、特に寛容の

精神を重視して、「ハロー・ディア・エネミー！」<sup>注</sup>の国際絵本展示が日本でも各地で開催された。

\*

二十年前私がA先生と園内で大きな声で口論していた姿を子どもや学生たちがどう見たか、それを考えるとぞっとする。A先生は私に山野草の苗を下さり、育て方を教えて下さった。私はその中でも「ヒナ草」と「いわうちわ」の花の咲くのを楽しみにしていたが、四月になつてもなかなか花が咲かなかった。

だが、桜が散りそめるころ、私は庭へ出てみてほっとした。「ヒナ草」の鉢の中に、るり色の小さい四つの花弁をもった三ミリ四方の花がいくつも咲いて、「ピヨピヨピヨ」と謡っているようだった。そして、「いわうちわ」の小さな葉の陰にもピンクの小さな花がほんわりと咲いていた。私は花たちに



▲展示された「平和、自由、寛容、反戦」の絵本（富山の大島絵本館）

小さな声で思わず「ハロー・ディア・エネミー！」  
と言った。

（日本国際児童図書評議会会員）

## 注

ハロー・ディア・エネミーの運動について

過去の戦争は国と国が行うもので基本は兵士が前線で戦っていた。しかし、現代の紛争は民間人を含む死傷者が九十パーセントを占め、その半分が子どもである。民族や宗教間の違いから根の深い紛争へと泥沼化し、第二次大戦後、戦争の性格が変ったことで攻撃が人々の生活に密着した形で深刻な影響が出ている。

一九八九年、国際連合で「子どもの権利条約」が採決されてから十周年を迎え、私達は子どもの人権を脅す紛争のない世界をめざして、積極的に行動しなければならない。

「平和、自由、寛容、反戦」の絵本の展示会、「ハロー・



▲初日、七夕飾りの下で展示された絵本を見る学生たち（大島絵本館）

ディア・エネミー」(敵さん、今日は)の運動は一九九四年一月ミュンヘンで始まり、その結果、十九か国、四十一冊の絵本にしほり、幼い子どもたちの平和を育む力強い原動力となって世界を駆けめぐっている。

JBBY(日本国際児童図書評議会)でも、この絵本による啓蒙が各地で行われ、富山では、大島絵本館で昨年の八月二日から十六日まで行われ、私も展示会場で啓蒙活動を行った。又、生協の青年部、婦人部に招かれ、講演会を行った。

二十一世紀に平和な世界をめざして、大上段にかまえるより、学校や地域、家庭、職場でも寛容ということの大切さを、私達の日々の小さな行為を通して、私達の心と精神を地道な形で育んでいくことが、今、最も大切なことではないかと思う。

# 編集後記

今年の扉では、一〇〇巻の表紙の中から十二冊を選び、毎号紹介していく予定です。今月は第九巻（明治四十二年）の表紙です。この巻には、倉橋惣三の文章が初めて掲載されました。また、この前年から和田実が編集にあたっています。

\*

創刊一〇〇巻を記念して、今月号は、本田和子先生に書いていただきました。

先生は「雑誌の運命」と題されたその文章の中で、「雑誌の使命と性格は、それを読む者たちが、読むことを媒介として、「思い巡らし」、そのことに「沈潜し」「思いを深める」

ことにあるのではないか」（本誌十一頁）、と書かれています。

これを読んでいると、私自身が子育てに忙しかった頃のことを思い出しました。

私は、新聞を読むのもままならなかったこの時期も、本誌の読者でした。月に一度この雑誌を読むと、わが子と初めて出会ったときの初心に返ったような気がしたものでした。そして、目の前の生活とその初心との落差に気づかされ、その日はいつもがっかりして過ごしました。けれども、その新鮮さも数日のことだけで、またもとの忙しさに追われる毎日でした。

そんな中で、本誌を読むことで、月に一度でも初心に戻ることでできたことをいまさらながらあったかかったと思います。

(A)

## 幼児の教育

第一〇〇巻 第二号

(二〇〇一年二月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十三年二月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目二

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

〒〇三―五三九五―六六一三(営業)

〒〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレー

ベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

## 手づくり保育シリーズ

なんでも「手づくり」してしまう先生方に贈るシリーズ。楽しみながら保育のちょっとしたコツをマスターできるのがチャームポイント！

最新刊



手づくり保育シリーズ①⑨

園・家庭・地域をつなぐ

## 話し方事例集

社会人としての保育者のコミュニケーション力をつけるための第一歩、話し方のノウハウをアドバイス。保護者との関係のもち方、地域のかかわり方、保育学習の中学・高校生への話し方など、今求められているコミュニケーション力をつけ、よりよい保育を目指します。

安見克夫／監修 B5判・96頁・定価：本体2,200円＋税



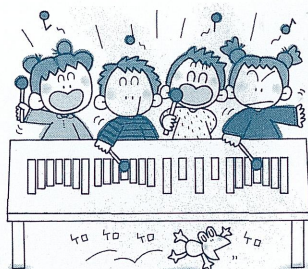
手づくり保育シリーズ②⑩

## あそんで楽器

歌にあわせてタンブリンやカスタネットを打ち鳴らすという従来の合奏から脱皮しませんか。

旋律やハーモニーを楽々演奏できるようにするための方法と、単純かつ本格的なリズムセクションをつくるのが、いかに子どもの合奏に大切であるかをやさしく解説。

最新刊



繁下和雄／著 B5判・96頁・定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの **フレーベル館**

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。



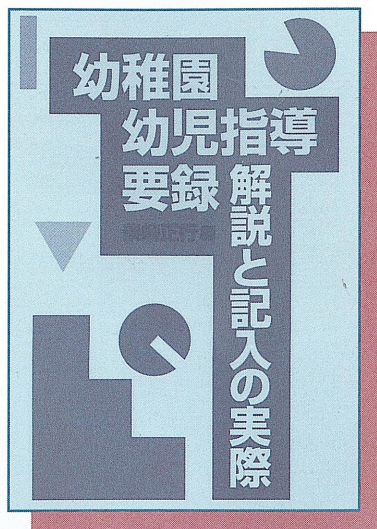
お待たせしました!!

文部省の指導要録作成協力者会議のメンバーによる解説書の決定版です!

# 幼稚園幼児指導要録・解説と記入の実際

最新刊

平成12年3月に改訂された「幼稚園  
幼児指導要録」の解説と具体的な記  
入の仕方を1冊の本にまとめました。  
ていねいで分かりやすい解説、今回  
から導入された満3歳入園の子ども  
から5歳児までの豊富な記入例を掲  
載しました。「要録」記入でお悩み  
の方に最適の本です。



## 〈内容構成〉

- 第1章 指導要録の意義
- 第2章 指導要録の解説と記入の実際
- 第3章 指導要録の取扱い
- 第4章 指導に関する記録の記入例

A5判・248頁

定価：本体1,500円＋税

柴崎正行 (東京家政大学教授) 編

執筆 安部真知子  
(香川県高松市立権紙幼稚園長)

岡上直子  
(東京都教育庁指導部主任指導主事)

片岡真弓  
(東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園教諭)

柴崎正行

田中雅道  
(京都市・光明幼稚園長)

松村和子  
(東京都・鷹谷さくら幼稚園副園長)

キンダーブックの  
**フレーベル館**